

「何か燃えようよ。」

今から三年前の三月、小学校六年生だった僕は、何人かの友達と体育館で遊んでいた。その時、その中の一人が、外に出て僕たちを呼びかけた。外に出てみると、遠くからでもはつきり見えるほど激しい炎、激しい煙があがっていた。それは、僕の家作業小屋が燃えている炎だと後でわかった。

僕の住む相島は、玄界灘に浮かぶ離島で、本土部の新宮港から約七・五キロの沖合にある。人口は約三七〇人、その六割が高齢者で島の主な産業は漁業である。

火の勢いは強く、サイレンを鳴らすように言われた若者は、あせつて何度もボタンを押し間違えたそうだった。しかし、僕たちが体育館から火事の現場に着いた時には、すでに多くの島の人たちが集まり、水上分団が素早く消火にあたっていた。消防団のおかげで、火事は燃え広がらないうちに消火された。この時、僕は、火の勢いと恐ろしさを初めて実感した。そして、僕たちの島にある水上分団は、僕たちの生命と財産を守ってくれるとても心強い存在だと改めて思い、消防活動の重要性を肌で感じるようになった。そんな中、僕は四月に中学校に入学し、入学と同時に相島少年消防クラブ（BFC）に入団することになった。

BFC活動は、明治三年に島で起こった火事がはじまりだった。人のほとんどが漁に出かけていた昼間に火災が起き、島に残った老人や子どもは何もできず、島の約八割の家が焼けてしまった。その経験から、生徒会活動が再開された六二年前、相島分校生徒会が自主的に「火の用心」を呼びかける夜回り活動を始めたことがきっかけで、相島のBFCが発足した。

現在、相島のBFCは、相島分校の全校生徒五名で構成されている。そして、僕たちは、年間を通じ週四回、夜九時から、拍子木をたたいて夜回り活動を行っている。さらに、毎年、自作の防火標語ステッカーを作成し、島の全ての家を訪問し、火の用心を呼びかけながら配布している。その他にも消防署の方が来られての救急法、消火訓練、規律訓練、ポンプ操作訓練を定期的に取り組んでいる。

相島は、狭い平地にほとんどの家が密集して建っている。また、島の高齢化も進んでいる。一度火事が起こり、対応が遅ければ、すぐに燃え広がり、多くの被害や犠牲を出すことになるだろう。だから、明治三年の悲劇を繰り返さないために、僕たちBFC団員も水上分団と協力して、島を火災から守っていきたく思う。寒い夜や、漁の手伝いの後の夜回りは、辛い時もあるが、島の人たちが安全に暮らしているように、みんな協力し活動していきたく思う。そして、経験を重ね、将来は、水上分団に入団し、今度は僕が、三年前に助けてもらったように、島の消防活動を支え、島を守っていきたく思う。